（別紙２）

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　　品 治　佑 吉

本論文は、かつて学の内外で華々しい活躍を遂げながら、現在の社会学においてさまざまな理由から忘れられた存在でもある清水幾太郎を、戦前・戦後の諸著作のテクストにおいて精査した社会学史の研究であるとともに、清水という揺れ幅の大きい個性の学知を貫いていた「社会学」の問題意識と認識枠組みを描きなおした労作である。

第１章では、学史研究やメディア論あるいは思想史のなかでの従来の扱いを精査し、さらには後続世代の回想録等の記述を幅広く検討することで、「個人と社会の闘争」「インティメートな闘争」「複雑な屈折と癒着」といった清水の社会学において重要になる問題設定を浮かびあがらせている。そうした作業を通じて、この対象に迫るための、非イデオロギー的なアプローチと自伝的記述の分析方法を論じている。

第２章では、出発点である 1930 年代初期の研究をとりあげ、同時代のマルクス主義との関係でイデオロギー批判の側面ばかりが強調されてきた従来の理解を修正し、当時の文化社会学・知識社会学の枠組みを深く内面化した「文化形態論」として、社会学の確立を目指してきたことに光をあてている。同時に、新たに生まれつつあったジャーナリズムという活動領域に身をおくなかで、青年への教養書の要素も加わり、後続世代の社会学者に大きな影響を与えていくことが明らかにされる。

第３章では、1930 年代中盤以降の「社会心理的な評論」を素材に、清水の社会学の核心が、人びとの生活における行動様式や、その解釈・表現・振る舞いの分析にあり、社会の個人に対する抑圧と、抑圧に抗する生存闘争の形態学・修辞学として解読しうることを示している。そこでの重要な著作が、戦後民主主義のもとでも復刊される『流言蜚語』であり、その集合現象の分析の中核が「競闘」あるいは「生きた闘争の把握」にあることが論じられる。

第４章では、これまでほとんど論じられてこなかった清水の「家族論」を、輿論研究や流言論の延長に位置づけなおし、「生存闘争の形式と修辞」という視点から、その社会への結びつけや屈折の力を分析している。こうした議論の文脈が、自身の「人生」を語りはじめるスタイルと強い連関を持っていることが指摘される。

第５章では、太平洋戦争終戦後に刊行され大きな反響を得た『私の読書と人生』と『愛国心』を取りあげながら、学問原理としての『社会学講義』『社会学入門』との深い内的連関を明らかにすることを通じて、清水において個人の経験を語ることと、社会学の探究と構築とがいかに密接に結びついていたかを論じている。

60 年安保闘争以後の社会学者としての歩みの包含は、今後の課題として残されているが、本論文は戦前戦後を通じた清水幾太郎の社会学の追究における隠れた「一貫性」の掘りおこしにおいて優れた貢献をなしており、本審査委員会は、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。